

研究ノート

教職課程において伝達される現代の社会問題 —科目「教育原理」に着目して—

○山口季音*1 田中浩二*1 梅木幹司*1 岡崎祐介*1

キーワード：教職課程、教育原理、社会問題

1 本稿の課題

令和4年度より、教職課程の自己点検・評価の公表が義務化された。教員養成に対する社会的な期待は高く、課題への対応が注視されている。

至誠館大学も教職課程を設置し幼稚園教諭、および中学校・高等学校の保健体育教諭を養成しており、さらなる自己点検と評価を実施していく必要がある。

一方で、教員に求められる能力や資質は多様なものである。授業運営にかかわるスキルはもちろんのこと、児童生徒や保護者、同僚とのコミュニケーション、特別なニーズをもつ児童生徒への対応力など、教員に期待されるものは数多い。

しかし、社会的に期待されるすべての能力が、その社会や時代で一樣に求められているわけではない。過去から現在、将来的な展望まで含めれば、教員に求められる能力には限りがないが、その時代によって焦点が当たるものは異なっているだろう。

そうした教員に求められる能力を探る上で、まずは、平成27(2015)年12月21日の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」を見ていきたい。

この答申では、これからの時代の教員に求められる資質能力について、次の3点が必要であると指摘している。

(1) これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らの

キャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である。

(2) アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高めることが必要である。

(3) 「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。

(項目の数字は筆者らが加筆)

以上の3点の内、本稿では(2)の能力に着目したい。中には「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応」と、様々な要素が羅列されているが、本稿が注目するのは「新たな課題に対応できる力量」の部分、特に「新たな課題」である。

また、2021年1月26日の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的学びの実現～』では、さらに学校教育の課題が示され

*1 至誠館大学 現代社会学部

ている。それらは、学校・教師の負担の増大、子どもたちの多様化、生徒の学習意欲の低下、教師の長時間労働、教師不足の深刻化、情報化、少子高齢化、人口減少、新型コロナウイルス感染等の感染症への対応等である。

社会が変化する中で、注目されている課題の種類や内容は変化する。たとえそれまでの課題が完全に解消されたわけではなくても、対応が想定されていなかった「新たな」課題が出現することは珍しくはない。そして、これらの課題の背景には学校教育にかかわる課題よりも、さらに広い社会問題があることも少なくないだろう。

このような「新たな課題」に対して教員が対応を求められているならば、教職課程において、現代の「社会問題」はどのようなものが、どのように教員をめざす学生たちに伝えられているのだろうか。こうした点を考察することは、教職課程の授業で学習する知識と現場での学びの一致やズレを考えるうえでも有益と考えられる。

本稿では、以上の課題を設定し、後述するように近年の「教育原理」にかかわるテキストの内容を分析することで、現代における社会問題が教職課程ではどのように伝達されているのかを考察したい。

2 研究の方法

2.1 「教育原理」に関するテキスト

本稿の目的を達成するため、教職課程の科目「教育原理」のテキスト内容を検討することとした。

教職課程の免許法施行規則に定める科目区分において、「教育原理」は「教育の基礎的理解に関する科目」であり、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に区分される。「教職概論」などの科目とともに、教職の課程において早い時期に学ぶ基礎的な科目であり、教育について幅広く多角的に学ぶ科目といえるだろう。

テキストの内容にも幅があり、歴史や教育思想を重

視する書き方が標準的だと思われるものの、現代の社会問題に触れ、紙幅を割いて扱っているものもある。

このような科目の特徴から、本稿では「教育原理」のテキストに着目し、教職課程において現代の社会問題がいかんにして伝達されているのかを検討することとした。なお、ここでいう社会問題とは、テキスト内において社会問題と明記されていたり、一般的に社会における問題・課題として提示されているものを選定している。

2.2 対象となるテキスト

現代の社会問題という観点からみて、対象となるテキストは2022年11月1日現在から、過去5年分のテキストとした。選定の期間に新しい版が出版された場合は、最新のテキストのみを選定した。

本稿で選定し、対象となったテキストは以下の通りである。対象となった文献数は32であった。

対象テキスト一覧（出版年順）

2022年

- ①ダイバーシティ時代の教育の原理:多様性と新たなつながりの地平へ 第二版 学文社
- ②実践につながる教育原理 北樹出版
- ③教育原理 改訂第二版 玉川大学出版部
- ④なぜからはじめる教育原理 建帛社

2021年

- ⑤教育原理・教職原論 協同出版
- ⑥新・教職のための教育原理 第二版 八千代出版
- ⑦教育の原理 ミネルヴァ書房
- ⑧教育原理を組みなおす 名古屋大学出版会
- ⑨教育原理 建帛社
- ⑩新版 地球時代の教育原理 三恵社

2020年

- ⑪教育原理（やさしく学ぶ教職課程） 学文社
- ⑫教育原理（乳幼児教育・保育シリーズ） 光生館
- ⑬最新教育原理 第二版 勁草書房
- ⑭考えを深めるための教育原理 ミネルヴァ書房
- ⑮教育原理（アクティベート教育学 1） ミネルヴァ書房
- ⑯子どもの豊かな明日を育む教育原理 光生館
- ⑰教育原理（MINERVA はじめて学ぶ保育 2） ミネルヴァ書房

2019年

- ⑱哲学する教育原理 教育情報出版
- ⑲教育原理（七猫教育テキスト） 七猫社
- ⑳新中等教育原理〔改訂版〕 福村出版
- ㉑教育原理（最新 保育士養成講座） 全国社会福祉協議会
- ㉒保育のための教育原理 ミネルヴァ書房
- ㉓教育の原理：子供・学校・社会をみつめなおす 学術出版会

2018年

- ㉔教育原理（新 保育士養成講座） 全国社会福祉協議会
- ㉕シードブック 改訂 子どもの教育原理 建帛社
- ㉖教育原理—保育・教育の現場をよりよくするために 嵯峨野書院
- ㉗教育原理 事始め 大学教育出版
- ㉘いまがわかる教育原理 みらい
- ㉙子どもの教育の原理 萌文書林
- ㉚新版 教育原理 一藝社
- ㉛幼児教育の原理 第三版 同文書院
- ㉜教育原理（よくわかる！ 教職エクササイズ） ミネルヴァ書房

（文献詳細については参考文献に記載）

以上のテキストの選定は、具体的には、書名に「教

育原理」あるいは「教育の原理」とある文献で、かつ教職科目の「教育原理」を学ぶ際に扱われるテキストのみに絞った。また、内容の検討手順は、まず目次および見出しを確認し、そこでタイトルとされている社会問題を確認した。

続いて、それぞれのテキストにおいて、どのような社会問題が記述されているのかを示す。

2.3 内容の検討

上記のテキストの内容の検討に際しては、内容において社会問題が記述されている部分を取り上げ、そのうえで分類を行った。

「教育原理」は、教職だけではなく保育士養成においても学ぶこととなっており、テキストも対象となる学生の範囲が異なることがある。今回の検討では、保育・幼児教育を対象としていない、あるいは教職課程全般を対象としているテキストが21、幼児教育・保育（一部小学校教育）のみを対象としているテキストは11であった。

また、テキストの作り方であるが、基本的には、多くのテキストでは「教育とは何か？」といった本質的な問いからスタートし、教育にかかわる思想や歴史、教育内容などを網羅的に提示している。提示する内容の中で、それぞれのテキストにおいて強調点が異なったり、独自の項目を設けたりしている^{註1}。時折、通常と思われる内容は盛り込みつつも、独自のテーマを幅広く盛り込んだタイプもあるが少数である。また、2021年1月26日の中央教育審議会答申の課題を考察するものもある^り。

検討の結果、近年の教育原理において取り上げられている社会問題は下記の通りであった。なお、社会問題の名称とともに言及していたテキストを①②と該当する番号で記している。ただし、下記で挙げられていない文献も、社会問題への言及が見られたものもある。あくまで今回設定した範囲での選定である。

9冊に記述あり

- ・不登校：④、⑥、⑧、⑱、⑳、㉓、㉖、㉗、㉓③

8冊に記述あり

- ・いじめ：④、⑤、⑥、⑱、㉓、㉖、㉗、㉓③
- ・格差や不平等：⑥、⑧、⑫、⑬、⑮、⑰、⑱、㉗

6冊に記述あり

- ・（子どもの）貧困：①、⑥、⑧、⑱、㉗、㉓③

5冊に記述あり

- ・児童虐待：⑥、⑫、⑱、㉗、㉗

4冊に記述あり

- ・ジェンダー（差別）：②、⑥、⑨、⑫
- ・セクシュアルマイノリティ（への差別）：②、⑥、⑧、㉗
- ・少年犯罪：④、⑱、㉗、㉖

3冊に記述あり

- ・体罰：②、⑱、㉓
- ・暴力行為：④、㉗、㉖

2冊に記述あり

- ・家族の変化：⑦、㉗
- ・少子化（高齢化含む）：⑪、㉗
- ・社会的排除：⑫、㉗

1冊に記述あり

- ・複合差別：①、外国籍の子どもへの差別：②、中途退学：④、DV：⑥、学力低下：⑥、オンライン：⑥、移民：⑪、家族像の偏り：⑫、キレる子ども：⑬、学力低下：⑬、教育を受ける権利の侵害：⑱、人権問題：⑱、学校の権威の喪失：㉗、学級崩壊：㉓、若者の就職難：㉖、学校事故・事件：㉗

以上のように、教育原理のテキストの中で提示される社会問題は数多い。最も言及が多かった不登校に加え、いじめ、格差、貧困、児童虐待から少年犯罪や校内暴力など、社会問題化した教育に関する課題は今でも残っている。

また、既存の社会問題を背景とした課題について、今でもそれらが残存していることで、学校教育自体の

意義が問われている、といった文脈での提示もされている。その一つは、「学校の権威の喪失」である。ここでは、少年犯罪が減少しているにもかかわらず、校内暴力や不登校の数が減っていないことについて触れ、学校に無理に行く必要がなくなっていることを指摘し、スマートフォンなどの普及により、「学ぶことの意義が見いだせなくなっている」という²⁾。

こうした古くから問題として提示され、近年も残る社会問題への言及がある一方で、近年までほとんど教員が取り組んでこなかった新しい課題の背景として社会問題が提示される場合もみられた。

次節では、この点について詳細を解説し、教育原理において伝達される社会問題の内容を明らかにする。そのうえで、最終的には提示された社会問題について考察を行う。

3 教職において伝達される社会問題

教師は学習指導、生活指導が本分である。これらを遂行する上で、教師は「新たな」課題を抱えることになったことが、本稿で選定されたテキストの多くで示されていた。

それら課題の背景にある社会問題は、多様性の課題、いわゆるダイバーシティをめぐる社会問題であった。つまり、子どもの貧困や（教育）格差、ジェンダー、セクシュアルマイノリティ等の不平等をめぐる問題である。次に、この多様性にかかる社会問題がどのように伝達されていたのかというと、2つの点に分けることができる。一つは、児童生徒の指導にかかわる問題としての伝達。もう一つは、教師に求められる福祉的なかわりという「支援」にかかわる問題としての伝達である。

①児童生徒の指導にかかわる問題としての伝達

今日の課題として、児童生徒の指導上考慮すべき多様性に関する考えが多くを占めていた。

たとえば、深谷・広岡編 2021 では、「多様な経歴を

有した児童生徒が今日の学校ではみられる」とされ、外国籍の児童生徒、海外で育った児童生徒、特別な教育的配慮を要する児童生徒、セクシュアルマイノリティの児童生徒などが挙げられている³⁾。

これらの「多様な経歴」等には、それぞれに固有の社会問題が存在している。こうした児童生徒に対する適切な指導を行おうとするならば、その背景にある社会問題への理解が必要不可欠であろう。このような児童生徒の指導にかかわる問題として、テキスト「教育原理」において社会問題が伝達されていた⁴⁾。

もちろん、これらの経歴等を有した児童生徒が現代になって新しく現れたわけではない。マイノリティとされる人々への配慮の必要性は、これまでも人権教育等のさまざまな領域において長年提示されてきた⁵⁾。そうした人権にかかわる諸問題が「教育原理」のテキストで詳細に言及されているのは、さまざまな差別や不平等をめぐる社会問題が提示される中で、多様性という新しい課題が現場の課題として浮上し、改めて様々な経歴の児童生徒への対応が求められたということであろう。

②福祉的な「支援」にかかわる問題としての伝達

2010年代、「子どもの貧困」問題が社会問題として提示された。2013年には、子どもの貧困対策法（子どもの貧困対策の推進に関する法律）が国会で可決成立し、その後施行されている。

こうした子どもの貧困は、過去にも存在していた。しかし、それ以前の学校教育は、「子どもの貧困」問題についてあまり語ってこなかった、といわれている^{註2)}。

「子どもの貧困」問題は以前からたしかに存在していたが、全体の話というよりは一部の例外的な問題とされていたのである。現代の社会では、そのような「一部」とみなされていた問題が、すべての児童生徒にかかわる可能性があるとして認識され、「自分には関係ない」ではなく、「大いに関係する問題」として、教職において不可欠な知識として提示されることがみられるよう

になっている⁶⁾。

さらに、この展開は「子どもの貧困」問題にとどまらない。近年の「教育原理」のテキストにおいては、「児童養護施設」などの児童福祉施設で生活する児童生徒にも着目されるようになってきているのである。そもそも幼児教育・保育も範囲とする「教育原理」のテキストでは、保育士養成にもかかわるために、児童福祉関連の知識が提示されている。たとえば、古賀ほか編著（2021）では、「子育て支援と子ども家庭福祉」という題で章が設けられている⁷⁾。しかし、教職課程全般では、「子どもの貧困」「児童虐待」などのキーワードは見られるものの、児童福祉施設を章立てに盛り込んだものはほぼ見られない。また、幼児教育を除いたこれまでの「教育原理」のテキストでは、そもそも児童福祉に触れることはあまりなかった。しかし、藤田・谷田川編（2022）では、「社会的養育によって育つ子どもの教育」という章が設けられ、児童養護施設や児童自立支援施設における教育が解説されている⁸⁾。

以上のように、福祉的な「支援」にかかわる問題として社会問題が伝達されていた。

4 おわりに

以上、科目「教育原理」のテキストを手掛かりにして、教職課程において現代の社会問題がどのように伝達されているのかを見てきた。

最後に、そうした課題に対する教師像はどのように提示されているだろうかを考え、現代社会における教師の在り方を考えてみたい。

中田編（2018）では、「発達支援的な教師」が必要とされていると指摘されている⁹⁾。子どもの教育的な側面だけではなく、発達や生活の側面もふまえた関わりを教師が求められているとすれば、それは教師一人ひとりの能力を大きく超えるかもしれない。文部科学省も「チームとしての学校」を掲げており、これらの課題は集団での対応が必要だろう。また、学校教員だけではなく、その他の専門家の知見も取り入れていかな

ければならないと考えられる。福祉の文脈によるならば、たとえば、スクールソーシャルワーカーの重要性を挙げることができるだろう。また、学校が児童家庭支援センターなど地域の児童福祉施設と連携をより密に取ることも想定される。

他方で、こうした課題を「教員養成」という観点から見た場合、次のような疑問を持つこともできると思われる。

第一に、学校教員は課題に幅広く対処するために、コーディネーター的側面を発達させるべきなのかどうかである。もう一つは、解消されない過去の課題が残存しつつ新たな課題が浮上する中で、教職課程では何を実際に教えればよいのかである。

まず、コーディネーター的側面について。学校教員の幅広い課題への対応は、前提として教員の本分である学習指導や生徒指導があつてのものだろう。しかし、コーディネーター的側面は、簡単に身につくものではなく、片手間にできるようなものではない。学校を中心とした実践の展開においても、課題の解決を教師が中心に担うべきだろうか。それとも、「専門家」に委ねるべきなのだろうか。

次に、そもそも、多くの課題があるとして、それに対応する仕方を、教職課程でどのように教えればよいのかである。たしかに、知識としては様々な社会問題とそれらにかかわる課題を伝達することはできるし、そのことは必要なことである。しかし、「どんな課題があるか」だけではなく、「その課題に対応するためにはどんな知識や姿勢が必要か」まで伝達されなければ、実践の場で意味を持つかは不透明であろう。こうしたことをふまえれば、今後の教職課程で求められるのは、現代の教育課題の「何に」対応するのか、それを見極め、学ぶことを選び取れる学生の育成が求められるだろう。

[註]

註 1 「教育原理」のテキストの中には、本稿で着目

する社会問題自体の見方を論じるものもある¹⁰⁾。

註 2 たとえば、荻谷剛彦（1995）『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』（中公新書）において、教師の間では平等な処遇が優先し子どもを「特別扱い」しない文化が存在し、貧困等の問題が見逃されやすかったことが指摘されている。

[引用文献]

- 1) 古賀一博（2021）「現代の教育課題とこれからの教育の行方を考える」（古賀一博・中坪史博・加藤望『コンパス 教育原理』建帛社, 123-132
- 2) 山田浩之（2019）「中等教育の現代的課題」（佐々木正治『新中等教育原理 改訂版』福村出版, 14-16
- 3) 津田徹（2021）「学校と子ども・教師」（深谷潤・広岡義之編著『教育の原理』ミネルヴァ書房, 193
- 4) 保道晴奈（2022）「学校はすべての子どもを受け入れられるのか？ 「マイノリティ」について」（國崎大恩・藤川信夫『実践につながる教育原理』北樹出版, 102-118
- 5) 吉村さやか（2019）「人権教育」（香川七海・福若真人・蒲生諒太『教育原理』七猫社, 143-144
- 6) 羽原哲男（2018）「現代日本の教育問題」（島田和幸・高宮正貴『教育原理』ミネルヴァ書房, 182
- 7) 中田周作（2021）「子育て支援と子ども家庭福祉」（古賀一博・中坪史博・加藤望『コンパス 教育原理』建帛社, 105-112
- 8) 二井仁美（2022）「社会的養育によって育つ子どもの養育」（『ダイバーシティ時代の教育の原理-第二版: 多様性と新たなるつながりの地平へ』学文社, 161-176
- 9) 中村正巳（2018）「教師の仕事」（中田正浩『教育原理 事始め』大学教育出版, 156
- 10) 池田隆英（2022）「学校教育の問題構成 一なぜ、学校で問題が生じるのか」（池田隆英・楠本恭之・仲原朋生『なぜからはじめる教育原理 第3版』建帛社, 127-136

[参考文献]

- 1) 安彦忠彦・石堂常世 (2020) 『最新教育原理 第2版』 勁草書房
 - 2) 池田隆英・楠本恭之・仲原朋生 (2022) 『なぜからはじめる教育原理 第3版』 建帛社
 - 3) 石上浩美 (2018) 『教育原理 保育・教育の現場をよりよくするために』 嵯峨野書院
 - 4) 坂越正樹ほか (2020) 『教育原理【乳幼児教育・保育シリーズ】』 光生館
 - 5) 伊藤潔志 (2019) 『哲学する教育原理』 教育情報出版
 - 6) 内海崎貴子 (2021) 『新・教職のための教育原理』 八千代出版
 - 7) 余公敏子・余公裕次 (2020) 『子どもの豊かな明日を育む教育原理』 光生館
 - 8) 香川七海・福若真人・蒲生諒太 (2019) 『教育原理』 七猫社
 - 9) 荻谷剛彦 (1995) 『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』 中央公論社
 - 10) 榎沢良彦 (2018) 『幼児教育の原理』 同文書院
 - 11) 北野幸子 (2018) 『シードブック 改訂 子どもの教育原理』 建帛社
 - 12) 木村元・汐見稔幸 (2020) 『アクティベート教育学 01 教育原理』 ミネルヴァ書房
 - 13) 國崎大恩・藤川信夫 (2022) 『実践につながる教育原理』 北樹出版
 - 14) 古賀一博・中坪史博・加藤望 (2021) 『コンパス 教育原理』 建帛社
 - 15) 古賀毅 (2020) 『やさしく学ぶ教職課程 教育原理』 学文社
 - 16) 紺野祐ほか (2019) 『教育の原理 子供・学校・社会をみつめなおす』 学術出版会
 - 17) 『最新 保育士養成講座』 総括編纂委員会 (2019) 『教育原理 (最新 保育士養成講座)』 全国社会福祉協議会
 - 18) 佐久間祐之 (2022) 『教育原理』 玉川大学出版部
 - 19) 佐々木正治 (2019) 『新中等教育原理 改訂版』 福村出版
 - 20) 佐藤光友・奥野浩之 (2020) 『考えを深めるための教育原理』 ミネルヴァ書房
 - 21) 下地秀樹ほか (2022) 『新版 地球時代の教育原理』 三恵社
 - 22) 垂見直樹 (2019) 『保育のための教育原理』 ミネルヴァ書房
 - 23) 三宅茂夫 (2020) 『教育原理 (MINERVA はじめて学ぶ保育 2)』 ミネルヴァ書房
 - 24) 西本望 (2018) 『いまがわかる教育原理』 みらい
 - 25) 平井悠介・曾余田浩史 (2021) 『新・教職課程演習 教育原理・教職概論』 協同出版
 - 26) 深谷潤・広岡義之 『教育の原理』、ミネルヴァ書房
 - 27) 藤田由美子・谷田川ルミ (2022) 『ダイバーシティ時代の教育の原理-第二版: 多様性と新たなるつながりの地平へ』 学文社
 - 28) 古橋和夫 (2018) 『子どもの教育の原理 保育の明日をひらくために』 萌文書林
 - 29) 松下晴彦・伊藤彰浩・服部美奈 (2021) 『教育原理を組みなおす 変革の時代をこえて』 名古屋大学出版会
 - 30) 新 保育士養成講座編纂委員会 (2018) 『新 保育士養成講座第2巻 教育原理』 全国社会福祉協議会
 - 31) 島田和幸・高宮正貴 (2018) 『教育原理(よくわかる! 教職エクササイズ)』 ミネルヴァ書房
 - 32) 中田正浩 (2018) 『教育原理 事始め』 大学教育出版
 - 33) 谷田貝公昭・石橋哲成編集、石橋哲成 (2018) 『新版 教育原理』 一藝社
- 付記 本稿は、JSPS 科研費 (課題番号19K14140) による研究成果の一部である。